

青春の門 五木寛之

第一部 後編

青春の門 五木寛之

第一部 筑豊篇

青春の門

第一部 筑豊篇

改訂新版

定価 一八五〇円(本体一七九六円)

著者 五木寛之

装幀 奥村鞆正 協力 鈴木正道

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二 一―一二
電話 東京(〇三)九四五―一二(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

第一刷発行 一九八九年十二月二十六日

©五木寛之 一九八九年

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小
社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問
い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

青春の門

筑豊篇

目次

ブローグ	7
骨 ^{ほね} 噛 ^か みの山	9
さがり蜘蛛 ^{ぐも}	15
夕陽と刺青 ^{いれずみ}	26
風の夜の相姦 ^{そうかん}	39
夏の日の秘密	49
ひづめの割れた者	77
母を犯す日	109
別れと拳銃	120
私刑の午後	133
竜五郎かえる	145
少年の決心	157
殺すということ	167

オートバイの怪物

ふたりの女

殺人者を求めて

男たちの中で

男がひとりの時

性の目覚めのなかで

仰げば尊し

まひるの爆走

女の匂い

黒い犬の影に

男と女の間で

十年先の約束

義理の世界

178

189

201

211

223

234

256

267

278

289

300

311

321

川筋喧嘩作法

春の病葉わくらば

熱く溢れるもの

女を売る町

落日のまえに

幼い初夜

犯す男たち

人と別れるとき

ひとりだけの夜明け

十八歳の出発

484 472 462 440 419 408 386 375 364 332

青春の門

第一部

筑豊篇

初出 週刊現代 一九六九年六月十九日号〜一九七〇年四月三十日号
従来、上・下二巻で刊行されていましたが、著者の全面的な加筆をえて一冊にまとめたものです。

プロローグ

香春岳は異様な山である。

けっして高い山ではないが、そのあたえる印象が異様なのだ。

福岡市から国道二百一号線を車ではしり、八木山峠をこえて飯塚市をぬけ、さらに烏尾峠とよばれる峠道をくだりにかかると、不意に奇怪な山の姿が左手にぬつとあらわれる。

標高にくらべて、実際よりはるかに巨大な感じをうけるのは、平野部からいきなり急角度でそびえたっているからだろう。

南寄りのもっとも高い峰から一の岳、二の岳、三の岳とつづく。

一の岳は、その中腹から上が、みにくく切りとられて、牡蠣色の地肌が残酷な感じで露出している。山麓のセメント工場が、原石をとるために数十年にわたって頂上から休まずに削りつづけた結果である。

雲の低くたれこめた暗い日など、それは臃んで崩れた大地のおできのような印象を見る者にあたえる。それでいて、なぜかこちらの気持に強く突き刺さってくる奇怪な魅力がその姿にはあるようだ。

目をそむけたくなるような無気味なものと、いやでもふりかえってみずにはいられないような何かからみあって、香春岳のその異様な印象をつくりだしているのかもしれない。

かつて戦国時代に、この一の岳に築かれた不落の名城があったという。その城を、

へ鬼ヶ城おにがじょうへ

とよんだそうだが、いかにも香春岳にふさわしい異様な山城の姿が霧の奥から浮かびあがってくるような気がしないでもない。

烏尾峠から遠望する香春岳は、その斜面がわずかにゆるやかである。それが峠をくだってゆくにしがたがって、しだいに峻嶒な感じになってくる。後藤寺線の陸橋をまたぎ、中元寺川をこえ、やがて田川の街に入るとさらにけわしく、三つの峰があいよって見えはじめる。

市内の繁華街をとりぬけ、赤煉瓦の二本の煙突の下につづく栄町の道筋をたどりながら、ふと気づくと、町の家並みの背後に突き立ったようなすがたで巨大な三連峰がぬつと頭上にのしかかってくるのだ。商店の看板や電柱のあいだからせまる香春岳の山の姿は、はじめて烏尾峠で目にした瞬間とはちがった印象で、また異様である。

曇天のもと、頭部をみにくく削りとられた香春連峰一の岳が屹立するすがたは、どことなく現在の筑豊のおかれている現実を無言のうちに象徴しているかのようだ。

明治の会社炭鉱開発以来、いくつかの戦争をはさんで劇的な盛衰をくりかえしてきたこの川筋の一角に、香春岳はいまセメント会社の手で少しづつそのすがたを、低く、平らにかえつつけていこうとしている。

やがていつかは、香春連峰、一の岳の名が、かつて筑豊に存在したいまはなき幻の名山として、伝説のように語られる日がやってくるのかもしれない。

骨嚙みの山

伊吹信介は、子供のころから香春岳を眺めるのが好きだった。

彼が物心ついたころには、すでに香春岳のセメント採掘は始まっている。正確にいうと、信介が誕生したその年、つまり昭和十年にセメント会社は山を削りはじめたのだ。

彼が生まれてはじめて香春岳を意識したのは、父親の背中におぶさって、田川の栄町の通りを帰ってくる朝のことだった。

どこから帰ってくる場所だったのか、それがなんのためだったのか、そのときの幼い信介にはまったくわかつてはいない。ただ、父親の背中からうしろをふりかえったとき、不意に異様なくらい大きな山が見えたのだ。その山肌に傷ついたような白い裂け目があり、そこが朝日の色に赤く染まっていた、なまなましく輝いていたのを彼ははつきりとおぼえている。

そして、そのとき父親の横には一人の女がいた。父親は片腕で信介をささえ、もう片方の手で女の子首をかたく掴んでいたようにおもう。その女は、燃えるような目をしており、父親の顔をひたとみつめながら歩いていった。

女がはだしだったのを信介は不思議に感じた。父親はゆっくり歩いてしたが、それでも女はときどき小走りについてきていたような気がする。女が走ると、泥に汚れた着物の裾が割れて、白い細い足が川魚の腹のように見えた。

信介がおぼえているのは、そのあたりまでである。あとは、きれぎれにいろんな場面が入りまじり、遠い夢のように残っているだけだ。

「待たんかい！」

と背後からよんだ威圧的な野太い男の声。

父親が立ちどまってふりかえると、また赤い香春岳が見えた。

「こやつばたのむ」

と父親は女に言った。

そして父親の背からおろされた信介は、女に手をひかれて走ったのだ。息がきれると、女は背たけほどの草の茂みに投げだすように体を伏せて、抱きしめた信介の顔を柔らかな胸におしつけた。草の匂いと、濡れた土と、女のつよい化粧の匂いがした。

どれだけの時間がたったのだろう。なにがおこっていたのか信介にはわからない。男たちの激しい叫び声や、荒い息づかいがきこえたただけだ。やがてあたりが静かになった。何人かの足音が遠ざかっていった。

「あんた！」

女が叫んで跳ねおきたとき、父親は朝日の色を全身に浴びてたっていた。顔も、胸も、手の甲も、真赤だった。血が盛りあがるように流れ落ちていた。信介は恐ろしくて体がふるえた。その真赤な父親の背後に、あの異様な香春岳の赤い山肌があった。

へあれはなんという山だろう？

信介の内部に香春岳のすがたが熱く灼きついたのは、その朝が最初だったようにおもふ。

そのとき幼い彼の手をひいて走った女が、伊吹信介の二度目の母親のタエである。

信介を生んだ実の母親は、彼を世の中に送りだして、その晩のうちに死んだ。だから信介は生母を知らない。

高校生になって父親の知人からきいた話では、生母は無口な、どちらかといえなくよくよ考えこむ性格の女だったという。

この地方では、そういうタイプの人間はあまり評判が良くないはずである。北九州のなかでも古くから「へ川筋気質」という独特の気風をはぐくみ、女も男同様に勇氣と腕力を誇った土地柄だ。明治のころは筑豊のあちこちに名のおった女親分たちがいて、その俠氣をうたわれたものだった。

明治から大正、そして昭和と、時代はかわっても、ヤマの女のそんな気性の激しさだけは失われてはいない。信介の二度目の母親になった森島タエも、その点では典型的な筑豊の女だったといえる。信介の性格の半分は、この母親によって後天的につくりあげられたものだろう。

信介の父親である五峯炭鉱の坑夫の頭領、伊吹重蔵が森島タエに惚れたのも、彼女のそんな氣つぶの良さに惹かれてのことだった。

そのあげく栄町のカフェーへ玄海から、前借金のため身動きのできないタエを力ずくで連れだし、追手と渡りあうという当時の新聞記事をにぎわす乱闘事件にまきこまれてしまったのだ。

信介が赤い香春岳の印象とむすびついておぼえている場面は、そのときのことである。その日、重蔵はタエのあとを追いかけてきた地元の新興やくざの塙竜五郎と素手で渡りあい、ぼろ布のように全身を斬りきざまれながらも相手の腕を折って脱出している。それは信介の父、重蔵が三十六歳の夏のことだった。

喧嘩はするが、刃物は使わぬ、というのがやくざではない伊吹重蔵の信条だった。それは、大正十

四年の、有名な「伊田町平松越えの大喧嘩」で、彼が骨身にこたえて学んだ実際の体験によるものだったらしい。

いずれにせよ、カフェー「玄海」の売れっ子女給、タエを連れだそうと栄町に乗りこんだときも、重蔵は素手だった。それどころか、まだ足手まといの信介をおぶっていったくらいである。

塙竜五郎という新興やくざがタエに食いついていることは承知の上だった。その結果、重蔵は追手に二十八カ所も斬られて、二カ月も病院通いをつづける破目になった。

ただ、相手の竜五郎が傷害罪やその他の罪も合わせてすぐ刑務所へいったので、タエをそのまま家に入れることができたのは、ありがたかった。それまで、彼は男手ひとつで信介と二人の世帯をやりくりしてやってきたのだ。やがて重蔵とタエは正式の夫婦になった。

タエはカフェーの女給がりとはおもえぬ甲斐性のある女だった。白粉気をすっかり落しても、なお目立つ顔をしていたが、気の強いだけが欠点といえはいえたかもしれない。もっとも、その氣っぷの良さに惚れたのだから、重蔵も文句はいえないところだったろう。

信介が二度目に強く香春岳を印象づけられたのは、あれはいつのことだったか。

そのとき、信介は義理の母親であるタエに手をひかれて小高い丘の上にいた。その丘からは、小さなマツチ箱を並べたような長屋が目の下に見え、黒の着物を着た男たちが、のろのろと動き回っているのだった。

白い花輪が、その薄汚れた長屋に似つかわしくない豪華さでたち並んでいた。

その花輪の下を、白い布に包まれた細長い箱のようなものが動いていく。突然、ひとりの女が長屋から飛びだしてきて、その箱をかかえた男たちに素手で殴りかかり、動物のような声をあげて泣きわ

めくのが見えた。

「あのひとはなんばしよつとね」

と、信介はタエにたずねた。

「骨嚙^{ほねか}みたい」

と、タエが答えた。

「ホネカミ？」

「ああ。骨嚙^{ほねか}み」

「骨ば嚙^かむとね？」

タエは黙っていた。信介は頭のなかで、ホネカミ、ホネカミ、とくりかえした。

「人が死なしたとよ」

と、タエがぼつんと言った。

「落盤^{らくばん}事故^{じこ}げな」

死人が出たのだ、と信介はおもった。するとあの花輪の下に集っている男や女たちは、その死人の骨をみんなで嚙^かむのだろうか。

「ホネカミ——」

「そう。骨嚙^{ほねか}み」

それが坑内で死んだ死者を^{とむ}申^{まう}う炭鉱の人々の神聖な儀式をさす言葉だということが、幼い信介にはまだわかつてはいなかった。ただ、骨嚙^{ほねか}み、という語感^{ごかん}と白い花輪にひどく無気味なものを感じて、両手をかたくにぎりしめて立っていた。

女の泣き声にまじって、男たちのうたう数え唄^{うた}が流れてくる。手拍子^{てびょうし}もきこえた。

そのとき、白い花輪の並ぶ小さな家々の背後にあの香春岳が見えた。そしてその頂上のあたりは削りとられて白く無残に陽に輝いていた。その部分はまるで、山の骨が肉を破って露出しているかのように感じられた。

「ホネカミ、ホネカミ——」

信介は恐ろしさで奥歯をカチカチ鳴らしながら、タエの体におしつけた。

もしタエが死んだら、父親の重蔵は彼女の骨を噛むのだろうか、と信介はおもい、急に息苦しい気持ちになった。そのとき香春岳を見るのが、なぜかとても怖い気がしたことを信介はいつまでも忘れなかった。